

ゆったん

五月の日曜日、姪(めい)の結婚式に招かれた。教会の結核式に招かれた。教会の式では、新婦は父親に導かれて入場し、中ほどで新郎が代わってエスコートする。はじらいの中にも幸せい

つばいの姪の横顔を見て、るうちに涙が止まらなくなつた。隣の妻も嗚咽(おえつ)してゐる。

姪と同一年で仲の良いところだった私の長女は、中学生的時に親せきの結婚式

歩きたいな」とわが家の家族新聞に書いていた。

披露宴での手作りのしおりには、小さいころの二人の写真に「十七歳で交通事故にあり、もう会えなくなつてしまった千尋ちゃんにも来てもらいたかったよ」と新婦の添え書き。写真も文章も涙でにじんだ。

長女の方まで幸せにと願ったこの日の少し前は、迎えられなかった娘の二十五回目の誕生日だった。親であるなら、死ぬまで亡き子の年を数え続けるのだろう。

五十三年前、前方不注意の車に小学一年生の娘さんの命を奪われた札幌の会

一に運転してください」「私は天国の娘に、次の誕生日を送った。

「お誕生日おめでとう。いつも心の中の千尋と一緒に理不尽な『クルマ優先社会』を問う活動を進めています。千尋も全国で命の重みを訴え続けて下さい」あなたの無念を思つては涙している父(母より)

何年たっても

(前田敏章「札幌・北海道交通事故被害者の会代表」)

ゆったん

今春、岩見沢市の岩見沢東高校の交通安全教室に招かれ「命とクルマ、残された親からのメッセージ」を伝えた。後日送られてきた

感想文の内容は素晴らしいものだった。感謝を込めて一部を紹介させていた

「以前は『悲劇の物語』程度にしか受け止めていなかった自分が恥ずかしい」「『交通事故死も殺人被害』と考えたことはなく、事故だからしょうがないと

思っていました」

「泥棒より交通事故の罪が軽いことを初めて知った。人の命が軽視されすぎた。運転の技術だけではなく、人格的に優れている人だけが免許をとるべきだ」

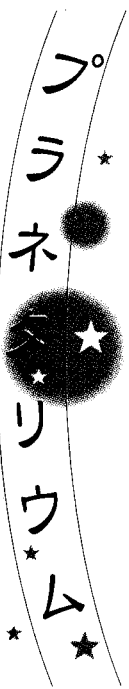
「自分が死んだ時悲しんでくれる人がいるように、運転中すれ違ふ人すべてにそう思ってくれる人がいると考えれば、絶対に軽い気持ちで運転できないはず」

「被害者にならない努力は難しいので、加害者にならない努力をする。加害者

「命を大切に」とよく言われます。これから私たちの世代がそのことをしっかりと受け止め、歩行者が安心して歩ける社会をつつていきます」

「頑張ってください」

「『命を大切に』とよく言われます。これから私たちの世代がそのことをしっかりと受け止め、歩行者が安心して歩ける社会をつつていきます」



交通安全への高校生の思い

(前田敏章「札幌・北海道交通事故被害者の会代表」)